

2022年8月7日 主日礼拝

説教題「私たちはどこに立つのか？」創世記 6 章 5～8 節、7 章 1～5 節

主任牧師 加藤 誠

「主は地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのをご覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」(創世記6章5～6節)

ノアの洪水と箱舟は良く知られているお話です。神さまが人を造られたことを深く後悔し、洪水をもってすべてを滅ぼそうとされたけれども、ノアとその家族だけは好意を得て生き延び、洪水の後、神さまは虹を見せて、もう二度と洪水をもって人を滅ぼすことをしないと約束されたのでした。

聖書は、神さまが深く心を痛めている様子をこう表現しています。「主は地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのをご覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」(6:5-6)。「この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。神は地をご覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた」(6; 11-12)。この箇所を岩波訳聖書は「この地は神の前に破滅し、暴虐に満ちていた」と訳しています。つまり、神さまとの関係を完全に失って「破滅し、暴虐に満ちた世界」は、最初に創造された時の「喜び」や「平和の秩序」を失い、神さまはそのことを深く悲しまれて、人を創造したことを後悔されたのでした。

そこで、神さまは大洪水をもって世界を水の中に沈め、新たにされるわけですが、問題は、これだけ大きな犠牲を払いながら「人間は新しく生まれ変わって、より良い存在になりえたのか？」ということなのです。

洪水の前と後で、人間は変わることができたのでしょうか。「その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人」(6章9節)であり、「このノアなら大丈夫だろう」と選ばれたのですが、そのノアの「無垢な信仰」は、世界を新しくし、神さまを喜ばせることができたのでしょうか。残念ながら答えはNOです。ノアの「無垢な信仰」をもって、世界を新たにすることはできませんでした。それどころか洪水の後、ノアはブドウ酒で酔っぱらい裸で寝てしまう大失態をおかしてしまうのです。

なぜ、このようなエピソードがわざわざ書かれているのでしょうか。多くの注解書では「ノアは無垢な信仰をもってはいたが、道徳的に完全な人間ではなかったのだ」とか、「聖書はノアの失敗も隠さずに正直に書いている」という説明がなされていますが、そうだとすると大きな疑問が首をもたげてきます。「ではノアが生き残った意味は何だったのか?」「多くの犠牲を伴った洪水にはどういう意味があったのだろうか?」と。神さまは「ノアなら世界を新しくしてくれる」と思ったのに、また失敗をしてしまったのでしょうか。皆さんはどう思われますか?

これはわたしの受け止め方ですけれども、「洪水」は神さまの深い心の痛み、神

さまの涙をあらわしていると理解します。もし、神さまが人間の破滅と暴虐を見て見ぬふりをして、洪水を起こすことなく放っておいたならば、私たちは神さまの深い悲しみと心の痛みを知ることはできませんでした。「洪水」は大変な犠牲を伴いましたけれども、その「洪水」を通して私たちは、人間を破滅と暴虐からなんとかしても救い出したい！…という神さまの深い祈りを知ることになったのです。

その一方で、私たち人間が自分の信仰と努力で世界を新たに創りかえることがいかに困難であるかも、洪水後のノアの姿から明確になりました。神さまは洪水の後、8章21節でこう言われています。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ」。私たちは、洪水という大きな痛みを伴う経験をして、自分の心の中にある悪を根絶することのできない、本当に弱いものなのです。けれども神さまが、そのような弱い人間とどこまでも共に歩む決意をされたのが、洪水の後の「虹」の意味だったのです。

毎年8月は日本に住む者たちにとって、かつての戦争の歴史を振り返り心に刻む大切な時です。昨日も広島原爆記念日の祈念式典が行われましたが、広島の人びとと街に今も深く刻まれている原爆の傷跡を見るたびに、「二度と同じような地獄絵図を生み出してはならない」という思いにさせられます。また被爆者の方々の「ネバーギブアップ」の力強い言葉に、「核兵器削減は難しいのではないか」とつい諦めがちになる思いに対してこそ、闘わなければならないことを示されるのです。

同時に教会の私たちは、かつて戦争に向かう歩みにおいて大きな過ちを犯した教会自身の歴史を心に刻み続けなければならないと思います。戦争当時のことを直接知る先輩の信仰者が少なくなっていく中で、今年は藤澤一清先生の言葉を週報の巻頭言で紹介させていただきました。かつて教会は、「信仰を守るため」「教会を守るため」という理由で、「神国日本」の神話の前に跪き、政治権力にすり寄り、生き延びようとしたのでした。当時のキリスト教弾圧の厳しさを知らない者が、「自分たちだったらそのような間違いはしなかった」かのように、その過ちを指さし、糾弾することはできません。けれども、その過ちを「なかったこと」にして、暗闇に葬ってしまってはならない。自分たちの弱さをきちんと見つめて、神さまの前に自分たちの間違いを認めていく誠実さを大切にしたいのです。なぜなら、その過ち多き教会と共に、十字架のイエス・キリストが歩んできてくださったからです。私たちが自分の弱さをごまかすとき、見て見ぬふりをするとき、それは私たちの罪を引き受けられた十字架の主から目をそらすことになるのです。

ノアとその息子たちは、自分たちの信仰で世界を新しくすることはできませんでした。この破滅と暴虐に満ちた世界を新たにすることができるのは、十字架の主イエス・キリストの慈しみと執り成しの祈りであり、私たちが立つことができるのは、この十字架の主のもとであることを心に刻みたいのです。